

# 4

## 和表裏・調気血類

### 1 白芍・桂枝

#### 単味の効能

【白芍】 29ページ参照

【桂枝】 3ページ参照

#### 配合による効能

白芍は和営斂陰の効能をもち、桂枝は和営解肌の効能をもつ。両薬を組み合わせると発汗の中にも斂汗の意味が、和営には調衛の力が含まれる。白芍は養血斂陰であるが滯邪することはない、桂枝は和営解肌であるが陰を傷めることはない。両薬は収斂と発散、寒と温の組み合わせであり、相互に制御して調和営衛・調和気血・鼓舞心陽・益陰止汗の効能をあらわす。

桂枝の色は赤であり、血分に入って血脈を通ずる。白芍は陰分にはたらき、益陰和中・緩急止痛の効能をあらわす。また桂枝は振奮脾陽、白芍は養胃陰の作用をもつ。両薬を組み合わせると陰陽ともに作用し、通調血脈・緩急止痛・振奮中陽・調整脾胃の効能を発揮する。

#### 適応症

1. 外感風寒表虚証における発熱・頭痛・汗出悪風・鼻鳴乾嘔・口不渴で、舌苔薄白・脈浮緩をあらわすもの

2. 営衛不和で、悪風・寒さを嫌う・背筋がゾクゾクするなどの症状をあらわす自汗や盜汗，あるいは風邪を引きやすい者や，心血不足・脾肺虚弱のもの躁汗
3. 心陽不振で，経気不和・気血不調をきたしているものの胸痺・胸痛
4. 気血不調に属する腹痛や，虚寒性の腹痛（腸痙攣に類似）
5. 気血不調に属する四肢の痺れ，疼痛，麻痺
6. 血管炎
7. 妊娠悪阻で，畏寒・食欲不振・乏力・悪心嘔吐，尺脈が弱い，などをあらわすもの

常用量 白芍 6～10g 桂枝 6～10g

### 臨床応用

白芍と桂枝の組み合わせは張仲景『傷寒論』の桂枝湯に由来する。発熱頭痛・汗出悪風・鼻鳴乾嘔・口不渴・舌苔薄白・脈浮緩を示す，外感風寒表虚証に用いられる。

『傷寒論』では「太陽病，頭痛，発熱し，汗出で，悪風する者は，桂枝湯之を主る」「病人，蔵に他病なく，時に発熱し自汗出でて，癒えざる者は，此れ衛气和せざる也，其の時に先だちて，汗を発すれば則ち癒ゆ，桂枝湯に宜し」と述べている。

『医宗金鑑』では，「張仲景の方剤の中で最もすぐれたものである。解肌発汗・調和営衛の効能を示す代表方剤である」と述べている。

施先生は川桂枝と杭白芍の炒めたものを用いる習慣があったが，営衛不和で時に躁汗のある表虚寒証の解けないものにより効果がみられた。四肢の麻痺・痺れ・関節疼痛のあるものには桂枝木を大量（15～30g）用いるとよい。寒がはなはだしく四肢発涼のあるものには，制附片を加えると効果がよくなる。

## 2 白芍・柴胡

【白芍】29ページ参照

【柴胡】味は苦・辛，性は微寒で，心包・肝・胆・三焦経に入る。本薬の味は薄く，気は上昇するので，透表泄熱の効能にすぐれる。少陽病半表半裏の寒熱往来・胸脇苦満・口苦咽乾・頭暈目眩の要薬である。また瘧疾の寒熱往来や，外感発熱などにも用いられる。疏肝解鬱・宣暢気血・散結調経の効能から，肝気鬱結により生じた胸脇脹痛・頭暈目眩・耳鳴り・耳が聞こえない，および月経不順・乳房脹痛（乳腺症によるものを含む）などに用いられる。

柴胡の気は陽で上昇の性質をもち，清気を上行させて昇陽挙陷の効能をあらわす。気虚下陷による気短・乏力・内臓下垂などにも用いられる。

### 配合による効能

白芍は養血斂陰・柔肝和血・緩急止痛・清熱虚熱の効能をもち，柴胡は疏肝開鬱・和解退熱・昇陽陽気の効能をもつ。白芍の酸寒斂収の性質は，斂津液・護営血・収陽気・瀉邪熱・養血柔肝・緩急止痛・瀉肝邪熱・補脾陰の効能をあらわす。柴胡は軽清辛散で，清陽の気を上昇させ，少陽の気を疏調し，理肝脾・調中宮・消痞満の効能をあらわす。両薬を組み合わせると相互に依存し促進し合って，短所を制御し長所を高め合う。白芍の酸斂は柴胡の辛散を制し，また柴胡の辛散は芍薬の散斂を佐薬として少陽の経に引薬し，清胆疏肝・和解表裏・昇陽斂陰・解鬱止痛の作用をあらわす。

### 適応症

1. 肝鬱気血不調に属する寒熱諸証
2. 肝鬱気滯・表裏不和に属するもの頭暈・めまい・胸脇苦満・両脇脹痛・串痛（急性肝炎・慢性肝炎・胆嚢炎・肋間神経痛における脇肋の疼痛・脹悶不舒などの症状）
3. 月経不順

常用量 白芍 10～15g 柴胡 6～10g

## 臨床応用

白芍と柴胡の組み合わせは『太平恵民和剤局方』の逍遙散に由来する。五鬱（木、火、土、金、水）〔五臓を指す〕および骨蒸勞熱に用いられる。肝は風木の臓で、自身は陰臓であるが、陽を動かし喜び条達の性質を有する。白芍の酸斂により養血柔肝し、肝の体を補いその機能を制する。また柴胡の辛散は補肝のはたらきをする。両薬を組み合わせると剛柔、動静ともに作用し、短所を補い長所を高め合う。昇陽斂陰・調和表裏の作用巧妙になるので、肝鬱気滞・表裏不和によるすべての症状に用いることができる。

柴胡と白芍の組み合わせは疏肝和血に重点がおかれているので、少陽証の寒熱を示すものには赤芍の組み合わせがよい。

施先生は、杭白芍と酢柴胡を炒用する習慣があった。これは疏肝止痛の効能を増強するためである。

## 3 柴胡・黄芩

### 単味の効能

【柴胡】57ページ参照

【黄芩】味は苦、性は寒、肺・胆・胃・大腸経に入る。本薬の苦は燥湿、寒は清熱の性質をあらわし、清熱燥湿・瀉火解毒の効能をもつ。湿熱蘊結による瀉痢腹痛・裏急後重〔悪臭のある下痢便は出るがすっきりしない〕・痢下赤白・湿熱黄疸などに用いられる。黄芩の体は軽く浮で、上焦肺火をよく清するので肺熱咳嗽に用いられる。また炭で炒めて用いれば瀉火止血の効能をあらわし、激しい発熱や、迫血妄行による咳血・鼻血・血便などにも用いられる。このほか清熱安胎の効能があるので、妊娠胎動不安などにも用いられる。現代薬理学の研究では、解熱・利尿・鎮静・降圧作用が認められている。高血圧症・動脈硬化・自律神経失調症、肝陽の亢進による頭痛・めまい・目赤・口苦・赤ら顔・心煩・不眠などに用いられる。

### 配合による効能

柴胡は苦平で疏肝開鬱・和解退熱・昇挙陽気の効能をもち、黄芩は苦寒で清熱燥湿・瀉火解毒・止血・安胎の効能をもつ。柴胡は半表半裏の外邪を瀉し、黄芩は半表半裏の裏邪を瀉す。柴胡は清陽を上昇させ、黄芩は濁火を降ろす。両薬は昇清降濁・調和表裏・和解少陽の組み合わせであり、少陽の邪熱を清する作用がさらによくなる。柴胡は開鬱に長じ黄芩は泄熱にすぐれるので、両薬を組み合わせると肝胆の気機を疏調し、内にこもった湿熱を清泄することができる。

### 適応症

1. 外感病（傷寒あるいは中風）で邪気が少陽に入り、表裏の間を往来することにより生ずる、口苦・咽乾・めまい・寒熱往来・胸脇苦満・心煩喜嘔・食欲不振など
2. 瘧疾〔マラリア〕で、寒熱を示すもの
3. 肝鬱気滞が継続して火と化したもので、少陽証を示すもの

常用量 柴胡 5～10g 黄芩 6～10g

### 臨床応用

柴胡と黄芩の組み合わせは張仲景の『傷寒論』小柴胡湯に由来する。和解少陽の効能があり、傷寒中風、少陽病の口苦咽乾・めまい・耳鳴り・往来寒熱・胸脇苦満・食欲不振・心煩喜嘔、あるいは胸中煩にして不嘔、時に渴き・腹中痛・脇下痞硬・心下悸を伴うもの、小便不利、あるいは不渴にして身有微熱、時に咳や発汗後の継続する発熱など、また寒熱・婦人傷寒・熱入血室によるうわごとなどに用いられる。また傷寒陽微結による頭汗肢寒・脈細便堅・半表半裏にも用いられる。程応旄は、「柴胡は疏木であり、半裏の邪気を外宣させる。黄芩は清火で半裏の邪気を内側から冷ます」と述べている。両薬を組み合わせると、通調表裏・和解少陽・肝胆の熱を清泄する作用を強める。胃不和で痰飲内停のときには、半夏を加えて痰飲を除き裏気の上逆を降下させる（和胃通陰陽を意味する）ことにより、柴胡と黄芩の和表裏の効